和飲酒多飲訓話

0期　田村　昭夫

（お読みになる前の予備知識。

道路工事のため今春の小屋酒場が中止となったのは前号にお知らせのとおりです。よって小屋のわずかな備蓄食糧は夏をも越して、ワンゲル規格にも適応できない物品となり、焼却及び廃棄処分を受けました。そのうちのカップ麺ビッグサイズ6個を、これはもったいないのではないかと、教祖様は隠匿ならぬ明匿されて、ザックにお詰めあそばされたのです。

その晩は芸者衆も愛用のひがし湯で垢を落とされ、歴史博物館前の芝生で立待ち月を愛でられました。翌日は長岡のお嬢様のもとを訪ねられるとのことで、事務局長宅で一杯のお湯をご所望になり、先のうちの1個をお召し上がりになった…その後の御話です。）

拝啓　舟田事務局長殿。即席麺をお宅で御馳走になってから、武蔵ケ辻まで来た時、突然腹に異常を覚えて、名鉄デパートの便所へ駆け込みました。山小屋の年越し麺の効果はてきめんでした。娘の所で残りのめんを全めん的にに調べたら総て、カビ入りめんでした。

そこで新たに教義がヒラメキました。

「めん喰い」を認ずる諸君、その中身をよく調べなさい。　　敬具

13期　吉本　良治

ふるさとの山々（卯辰山、医王山、そして白山）

山は眺めるだけ、せいぜい春と秋の山小屋酒場の2回山靴に足を通すだけとなった今、紙上で思い出と共にふるさとの山々をトレッキングして見ます。

わが家は金沢市の隣、松任市の郊外の田園地帯の真ん中にあります。外に目を向ければ左から医王山、戸室山、倉ガ岳、そして正面に獅子吼高原さらにその右に白山が見渡せる絶好の場所にあります。（私の知識では白山主峰から右につながる山々の名前はわかりません）さらに通勤途中の手取川を渡るあたりから笈ガ岳の尖鋭な姿を眺めることができます。これらの山々には金沢に生まれ育ち、ワンゲルを卒業した私にとって多くの思い出が詰まっています。

金沢市民にとってもっとも身近な山は「卯辰山」です。

春の花見、遠足、そして今はなくなってしまった金沢ヘルスセンターなどこの山と市民との関わりは親密なものがあります。それに昔は横空台の北側の斜面を利用したスキー場もありました。（リフトなんてものはありませんでしたよ）

私にとっては小学生の「林間学校」が最も印象に残っています。当時虚弱体質だった私は4、5、6の3年間、夏休みの度に林間学校へ通ったものです。天神橋でバスを降り今の金沢ユースホステルのあたりで設営されていたテントまで毎日歩いたものです。おかげで徒歩コースの途中にある顕彰碑や文学碑は今でも記憶しています。それ以外はテントで昼寝をしたことしか覚えていませんがね。

もちろんワンゲルで奥卯辰山健民公園（大学1年のときまでは金沢ゴルフクラブだった）までトレーニングのため走ったことも鮮明に記憶しています。特に子来町付近の長い昇り坂の辛かったこと。

近年は奥卯辰山墓地公園に年に数回墓参に行き、帰りに健民公園を散歩したり望湖台から金沢市街を眺めたりする程度です。もちろん徒歩でなく車で

金沢市を代表する山は「医王山」でしょう。

残念ながら高三郎山でも大門山でも金沢市の最高峰である奈良岳でもありません。医王山、犀川、浅野川の３点セットは多くの小中学校の校歌や校章に使われていますし、市街地のどこからでも眺めることのできる戸室山をしたがえた左右対象の特徴的な姿は覚え易いですから。

私にとって遠足ではなく山登りとして初めて登ったのは医王山です。子どもたちにとっては中学生で医王山に初めて登るのが普通ですが、私の場合はなぜか高校１年生の夏でした。同級生のＹ君、Ｔ君の２人と国鉄バスで加賀二俣まで行き鳶岩を経て頂上へ、帰りは多分見上山荘前からバスに乗ったのだろうが記憶にありません。記憶しているのは途中でＴ君からもらって飲んだ「コカコーラ」の印象だけです。初めてのコカコーラの味は「＊＊？？？！！！」でした。

この時の経験が私の「ワンゲルへの原点」です。同行したＹ君と後にワンゲルへ入部したのだから。

先日の山小屋酒場の夜に田村教祖が「ワンゲルで初めて登った山は医王山だった」との話があり、同じ原点なんだなと思い本稿を記すきっかけの一つになっています。以後は新入生歓迎登山、新２トレでの山行くらいであり疎遠になってしまいました、活動の中心はベルクハイム、高三郎山にありましたから。

先日、富山県の「イオックスアローザ」温泉の帰り道に、同行した家内に「富山県の人たち特に福光地方の人たちにとって医王山は富山の山なんだよ」との話をしたところ、私と同じく金沢育ちの家内にとっては信じがたく、許されないことでした。曰く「医王山は金沢の山です」同じ論理で「白山は古来より”加賀の白山”であり、石川県の山です。」となります。これが県民特に金沢以南の人たちの思いでしょう。

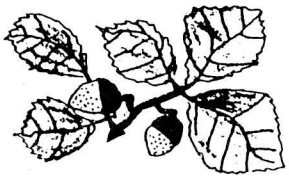
ふるさとの山の代表はやはり「白山」です。

御前峰でも大汝峰でもなく「白山」なのです。初めて登ったのは確か１年の時ワンゲル１０周年記念登山だったはずです。白山については語り始めればきりがなく、それぞれに思いがあるはずです。深田久弥は日本百名山のなかで「加賀の平野でも、私のふるさとの町から眺めるのが最上であることを、私は自信をもって誇ることができる。」と書いているが、私は大聖寺からの眺めより松任平野からの眺めの方が素晴らしいと自信をもっていうことができる。

山から足が遠のきましたが、毎年同じ時期に必ず訪ねるところが２カ所あります。一つは水芭蕉の時期の大嵐山です。最近は有名になりすぎ花より人の数の方が多いように感ずる時もありますが、丸山や大倉岳より容易に水芭蕉を見ることができます。

もう一つは石川県林業試験場の樹木園です。桜の時期、かたくりの時期に樹木園、獅子吼高原の麓、白山さんとめぐるのは里山の自然観察が手軽にできて楽しいものです。

これからは少しづつ、自分の足でふるさとの山を巡って見ようと思っています。機会があれば今度は卯辰山から医王山につながる山々を紙上トレッキングしてみます。



平和な時代に「召集令状」を出しました。私からの封書が恐ろしい方も既に発生しているようですが…それなりに「白羽の矢」なのですから、宝籤でも買って腹いせして下さい。

従来、山に登るＯＢは、暇かあるいは職種的に恵まれているか、かなり特殊の側に属する…らしき傾向がありました。下っ端故、あるいは上司故、登れないと諦めている方もあられるかと存じます。そんな中で、職場ぐるみで、職場から見える山々にチャレンジの森島様からの原稿は、まさに待ちこがれていた類の原稿でした。

さらには、原稿掲載料まで同封いただき、心おきなく写真の網掛け掲載を行えました。ご配慮の数々ありがとうございました。

鈴鹿　７（セブン）マウンテンを制覇！　　4期　森島　　稔

はじめに

原稿の召集礼状が来た。船田事務局長からの督促状である。７月に転居通知を出したとき「そのうち送る」と書いたことを事務局長は忘れていなかった。恐るべし！滅多なことはいわないほうがよいという証明である。しかし、私自身もこれが頭から離れず、７月以降重荷になっていたので、意を決して書き始めることにした。
今も長野から名古屋に向かう特急「しなの１２号」の中で書き始めたのである。

私が三重県の四日市市と桑名市に挟まれた川越町にある「中部電力川越火力発電所長」に着任したのは平成４年の夏のことであった。

その時は発電所の規模が７０万 KW２機であったが、世界でこの２機しかないという最新鋭のプラントをもつ発電所で、平成元年に１号機が営業運転を開始した発電所である。そして着任して１ヶ月後に３，４号機の増設工事を開始するための建設事務所が併設され私は所長兼務である。

２１年ぶりの火力発電所勤務でしかもいきなり責任者ということになり、どう振舞えばいいのかわからないまま、とにかく自己流で、「わかりやすいこと」を主眼に３００名あまりの所員を引っ張っていた。

毎年の新年祝賀式には年頭宣言をすることとし、具体的に、「年間に単行本５０冊読む」「プールで年間１万メートル泳ぐ」「映画館で映画を１２本以上見る」「毎週７万歩歩く」「ゴルフに２０回以上いく」などなど。これを、私の語録としている「有言実行」の実践として毎年宣言していたのである。（余談ながら「私の有言実行は」「有言すなわち公言・広言すれば実行される」であり、年頭の宣言も、公言することにより一年中、みんなから「・・やってますか？」などといわれることになるので実行する確率が高くなるものである、ということである。したがって順序も「有言実行」「有言不実行」「不言実行」「不言不実行」の順になるのである）

さて前置きが長いが、平成１１年１月４日。７回目の新年をむかえることになったが、もうネタもきれてきたし、大きい数字は無理だな、もっと小さいので・・・・と考えているうちに「７」が浮かび、「鈴鹿７マウンテン」がひらめいたのである。

鈴鹿はホンダでも有名だが、鈴鹿山脈は滋賀県と三重県の県境にあり、ほとんどが１０００～１２００m級の連山でそのうちの７つを選んで７マウンテンとして宣

平成１１年１月
環境保安課

『鈴鹿7（セブン）マウンテン踏破スケジュールについて』

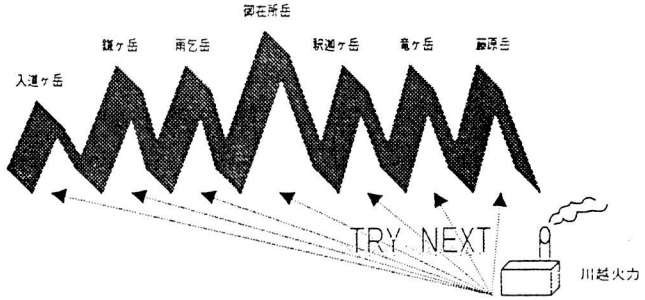
“’９９所内各課ＴＲＹ　ＮＥＸＴ企画”

<主旨>

見学に来所されるお客様に、発電所から見える鈴鹿山脈を説明していますが、その山々に実際に登って見れば、説明時に心が伝わるはず（説得力向上）と考えています。

川越火力の思い出に　ＴＲＹ　ＮＥＸＴ！！

よって、所長のスケジュールを作成し各課と調整したいと考えていますので、よろしくお願いいたします。



<参考>

時期的なもの：３月後半まで雪が多く、雪が固まっているとのこと、よって、より安全に登る場合アイゼン等が必要。

：４月初旬から中旬まで雪は残っているが、春の花が咲き始める頃であり登り始めとしては良い頃・・・

：５月もう雪の心配はなく、新緑、花の咲き始め。

：６月晴天事は５月同様、しかし、雨が心配。

：その他、安全性，景色等を考えると４月中旬～６月中旬（梅雨前）の正味２ヶ月で計画するのがベターと考えます。

<スケジュール表>

３月から６月の間の土日および祭日と電力館については休館日および全休日の日にちを入れてあります。

御都合のよい日（予定）に○印等を記入願います。

7マウンテン	計画部署	3月（土・日・祝日：丸数字）									4月（土・日・祝日：丸数字）									5月（土・日・祝日：丸数字）													6月（土・日）							
		6	7	13	~~14~~	20	21	22	27	28	3	4	10	11	~~17~~	~~18~~	~~24~~	25	29	1	2	3	4	5	8	9	15	16	22	23	29	30	5	6	12	13	19	20	26	27
御在所岳	所長室	◎																																					○	△
雨乞岳	総務G																													◎	△									
入道ヶ岳	保修課	◎																																						
釈迦ヶ岳	ＬＮＧ課																																◎	△						
竜ヶ岳	発電課												◎	△	◎																									
藤原岳	環境保安課																																				◎	△		
鎌ヶ岳	電力館	（休館日・全休日：丸数字）									（休館日・全休日）									（休館日・全休日）													（休館日・全休日）							
		8		15		19		23		29	5		12		16			19	26	6		10		17			21		24		31		7		14		18		21	28
																						◎		△																

◆計画部署の実施内容：①行動計画詳細立案（所長との詳細打合せ，山でのイベント企画　等）　②所内周知（個人参加の募集）

以　上

伝されている。私が中部電力に入社し会社人生のスタートを切ったのは四日市市内の「四日市火力発電所」で、私の入社直後に完成した同期？の発電所であるが、当時は当直勤務であったので、夜勤を終えると寮でおにぎりを作ってもらい、そのまま若手を引き連れ鈴鹿の山に登っていたもので懐かしい山である。

会社人生も終盤になり今年が年貢の納め時と考えると、われながらよき目標と悦にいったものである。

こうして宣言したあと、あらたな動きが始まった。かねてから進めていた「川越火力発電所１０周年記念行事」とリンクして所大の行事に格上げすることになり、所長の個人の目標から所全体の行事になったのである。こうなると動きが速いのが会社の特質である。まず７つの部署にわけ、アミダクジか何かで責任分担が決められたのである。私の知らないところですべてが仕切られ私は日程調整だけになってしまった。

①御在所（ございしょ）岳（１２０９．８m）　　Ｈ１１．２．２０（土）

最初の分担は所長室。所長・副所長、５名。御在所岳は７マウンテンの主峰である。

時期は冬。冬山から始めるとは思っていないところへ幹事の副所長は目をつけた。スキーでもやる気か？　事前偵察する人が出てくる。（このときから必ず事前調が行われることになる）

実行当日、天気はまずまず。御在所岳の麓は歴史の古い湯ノ山温泉があり、山頂までロープウェイがある観光地でもある。

麓を少し歩いて蒼滝を散策、防寒衣に身を包み万全でロープウェイに乗る。（あれ登山でないの？）　　ロープウェイ頂上駅では気温低く寒いが樹氷がまぶしい。

スキー客のゲレンデの端をラッセルして山頂へいく。三角点まで斜面を歩く。スキーヤーは不思議そうな顔をしつつ迷惑そうであったが無事？山頂を踏む。

この日の参加者は所長室２名、友情出演３名の５名。

頂上からスキー場に戻ると天候は急変して吹雪になった。避難小屋で早速持参した酒、肴を出し宴会の開始。スキーヤーは吹雪の中でも滑っていて入ってこないので我々のみで盛り上がる。いいかげん酔ったところでロープウェイにて下山。麓にはなじみの旅館があり女将に頼んで温泉に入らせてもらう。

かくして鈴鹿７マウンテンの第１号が終了した。いいのかな？

案の定、翌週、所内では「そんなのあり？」という声が・・・・

「山に登る」といったのだ。「くやしかったらロープウェイをつけたら？」

所長室が御在所をひき当てたのは天の助けかも。

（この後、最終回に御在所を登りなおすこととなっていたが実行されなかった）

②入道ヶ岳（９０６．１m）　　Ｈ１１．３．６．（土）

朝から快晴。近鉄四日市駅から貸切バスに乗る。４０名も集まったら臨時バスを出してしてくれるという。幹事の腕である

登山口は椿大社という大きな神社の裏になる。この椿大社は猿田彦を祭る伊勢一ノ宮である。「一ノ宮」の名称は各地にあるがここは伊勢の一宮である。

この椿大社は中部地区では工事関係者などにも有名で我々も毎年一月に発電所の行事として参拝しているなじみの神社である。

（ちなみに大社という名は条件があるようで簡単にはつかないそうである。大社と名のつく神社を数え出してみてもらえばわかる。出雲、多賀・・）

のっけから急な石段を登ることになる。コースは北尾根コース。事前偵察隊の資料では「ハイキングに毛が生えた程度」とあったものだから早速参加者から「どんな毛や？」と怒ること、怒ること。私は相変わらずマイペースで歩く。

今回は保修課の担当なので若者が多い。３０分遅れて登山開始した連中が３０分早く着いて頂上で昼食をしている。我々は２時間半行程で頂上である。標高は９０６．１ｍと高くはないが眺めはすばらしい。伊勢湾を眼下に見下ろす。川越火力発電所の煙突（２００ｍ）やプラントが平野にひときわ目立つ。

頂上で詩吟（後述）を朗じ、二本松尾根コースを下山。麓の椿大社付属会館一風呂浴びて宴会。どうやら下山したら風呂・宴会が定番になるようだ。

③竜ヶ岳（１０９９．６ｍ）　Ｈ１１．４．１７．（土）

分担は発電課である。所内でもっとも所帯の大きい課であるが大半は３交代勤務者であり、参加者はそれほど望めない。

４／１０に計画したところ雨のため一周延期したらメンバーも入れ替わる。今日は２９人が各地から宇賀渓キャンプ場に集まってきた。キャンプ場から中腹の小峠まで車で運んでくれるという。ここから登山開始。鈴鹿山系の縦走コースの峠（石グレ峠）にでて、竜ヶ岳を目指す。２時間余で頂上に到達。視界は３６０°の大展望台である。おにぎりの軽い昼食の後、詩を吟じて下山。午後３時には麓のキャンプ場に戻り、河原で早速バーベキュー大会。発電所のように俗にいう現場では機材が豊富である。２０畳くらいのシートからコンロ、鉄板、と機材が集まっている。ないのは女性の姿くらい、見事に男性社会である。登山中にもいき会う人から「30 人も男ばっかり。へー」と言われたなあ。

この場所は温泉がないので風呂なし。肉をたらふく食べて帰途に。

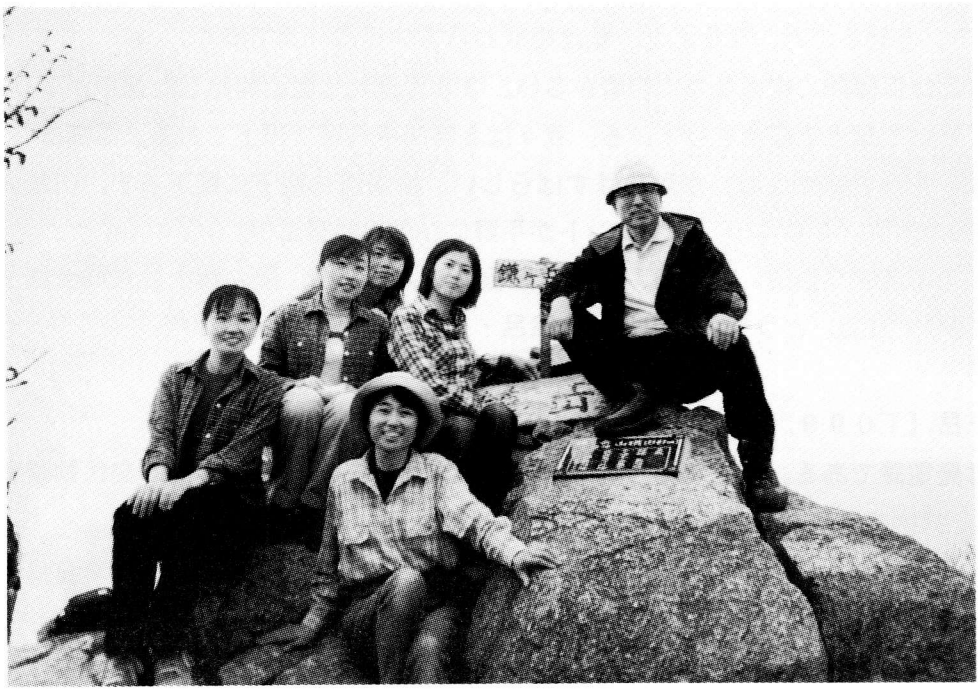
④鎌ヶ岳（１１６１．０ｍ）　Ｈ１１．５．１０．（月）

御在所岳の南にあって、鈴鹿の「槍」と呼ばれる。担当は川越電力館（ＰＲ館である。このメンバーは社員４名とコンパニオン１５名からなる職場で、毎週月曜日が休館日である。このため、５／１０の月曜日が選ばれた。もちろん私は休暇を取っての参加である。

彼女たちは２０～２４歳で山もほとんど経験していない人たちで、参加してくれるか怪しかったのでもっぱら偵察・準備は副館長（男）の役目である。しかし、電力館の若い女性の担当ということでもあり、協賛の若者が各課から参加するであろうことは読み筋にある。案の定、女性５名に取り巻き１８名、計２３名になった。

御在所岳のとき同様、湯ノ山温泉からロープウェイでまず御在所岳頂上へ行く。そのまま尾根伝いに鎌ヶ岳に向かう。途中、武平峠まで下るがここから鎌ヶ岳までが険しい。鎖とロープを使って一気に頂上に上る。まさに「槍」であり、頂上には２～３人しか居れない。

登りきったときの彼女たちの汗の顔のいいこと。口口に「初めて・・」「ワーきれい・・」などとはしゃぐこと。私には娘がいないので彼女たちの歓声が珍しい。下山は長石谷を歩いて下るのだがこれが結構急で膝がガクガクしてみんなこらえる



のがやっと。

ロープウェイの麓駅に近づいたところで、風呂や宴会の心配をしている。アテにしていたホテルには予約が入れてないという。私の手帳から近くの国民宿舎に携帯で電話させてみたらＯＫ。山で携帯が使われるようになったのだと妙に感心。

一風呂浴びて、ジョッキで乾杯。みんな満足感でいっぱい。

私はこの日、もう一仕事である。地元の有力者との懇親を予定しており、背広一式を麓の駅のロッカーに入れておいたのである。月曜日のことなので休暇とも告げず、約束していたのである。風呂に入る前に背広をとってきて着替え、解散と同時に四日市の街に出かける。

時間ぎりぎりに到着し、陽に焼けた顔でばれる。山の話で場が盛り上がり、「若いね」と言われてまんざらでもない。二次会まで騒いで終電車で自宅に帰ったら日付変更直前。一日フル回転で終わる。翌日メンバーから私のタフさを冷やかされる。

⑤雨乞(あまごい)岳（１２３８．０ｍ）　Ｈ１１．５．２９．（土）

いよいよ７マウンテンも半ばを越えた。７月までにあと３つ。急がねば。

今日の当番は総務課である。総務と言えば事務系の人ばかりといってもよい。寮母も含めて女性も多い。雨乞岳は鈴鹿７マウンテンでも縦走コースからそれていてあまり人気がない。私も若いころ１回しか登らなかった。

今回も偵察がなされている。三重県と滋賀県を結ぶ国道４７７が武平峠で山越えをする。ここが雨乞岳登山の入り口である。今度は湯ノ山温泉から通称「鈴鹿スカイライン」の有料道路を車で登り、武平峠で駐車場におき、登山道に入る。

多くの沢を横切り、ひたすら雨乞岳を目指す。参加者は私はもちろんであるが、総務課の人のほか各課の友情参加があり、２８名になった。ところがそのうち５名は偵察に参加したので今回は麓でバーベキュー待機するという。頂上へは２３名が向かっている。

この山は標高はあるが急な上りがなく、道のりが長く一気にというわけにはいかない。しっかり歩かされる。

武平峠から雨乞東岳に３時間余りして到着し、本峰の雨乞岳にはさらに１５分という具合。

そして、昼食、詩吟。下りは同じくだらだらとひたすら足を運ぶしかない。歩かなければ届かない。元の武平峠に戻ったのは１５時を過ぎていた。

ここからバーベキューの準備ができている場所まで車で運んでもらってようやく靴が脱げる。

早い連中はすでに１時間前に着き近くの国民宿舎で風呂に入り、すでに飲み始めている。我々も後を追う。改めて５つ目の山に乾杯。

⑥釈迦ヶ岳（１０９２．２m）　　Ｈ１１．６．５．（土）

いよいよ追い込みに入る。６つ目はＬＮＧ課の担当である。釈迦ヶ岳は７マウンテンのなかで北から３番目。ロープウェイや車で嵩上げできる山（３つ）とはちがって麓からしかも一気に尾根を登っていかなければならない山である。ＬＮＧ課長は義足であるがこの日のため事前登山を行い義足の調整しての登山である。
もちろん若手のサポート隊もいる。１７名が登り始めてから汗だくである。さすがにきつい。私は最初からマイペースで、先導から離れているので気遣ってくれるがはるかに私より遅い組も必ず居るので中間位にいつも居ることになる。この頃になると皆もわかっているので誰も気にせず、それとなく前後を固めている人が居るという感じられる程度である。

しかしさすがにきつい。というのも５月半ばから毎日夜のお付き合いがつづいており、かなりボディブローを食っているからである。６月末の退任を予想してのお付合いがまだまだ続く。

多少夢遊病者のようになりながら松尾尾根の頭まで３時間。途中尾根からの景色と谷風で元気を取り戻したが、それにしてもきつい。

松尾尾根の頭（１２９０m）でおにぎりの食事を済ませ後者組といっしょになる。釈迦ヶ岳（１２９０m）の頂上はそのまま３分程縦走路を歩いたところにある。皆で記念撮影して頂上を往復して下山。元の道を下る。下りは速い。ほとんど休憩なしで
下る。２時間以内で下るが若い者は１時間余りだったと言う。

麓の谷川のある朝明（あさけ）テント・バンガロー村でバーベキュー。材料をしっかり仕込んできているので食べきれないほど。マイカー組には悪いが缶ビールが次々に空いていく。

しかし、さすがにきつかった。

⑦藤原岳（１１４３．４m）　　Ｈ１１．１０．１７．（日）

６月までに７マウンテンを制覇するはずだったが６／１９（土）は雨天のため中止。次の６／２６（土）再設定の予定をしたがすでに人事異動の内示後になり、結局７月以降に持ち越しになった。

私も週５日の送別会が続き、６／２１には新しい会社の株主総会出席と引継ぎに上越市と東京にでかけ、６／２２上越共同火力発電株式会社の社長に就任している始末である。中部電力は６／３０に退任したのでその間兼務していたのである。

鈴鹿７マウンテンもこれまでと思いながら、名古屋から長野経由で妙高の麓を走る信越線に揺られながら直江津に入ったことであった。

その後、再挑戦のチャンスは８／２１にあった。８／２４に名古屋出張があり帰省することになったのである。がよく考えたら、２２日は年に１度の発電所行事があるので所員は忙しい日である。前任が知らぬはずがない、電話するのをやめた。

次のチャンスが来た。１０／１８日に名古屋での仕事ができ１６日から帰省すれば
１７日に実施可能である。週間天気予報も「曇り」でまずまずだ。しかし、いまさら
という気もする。ぎりぎりの１５日（金）にもとの分担の環境保安課へメールを打った。夕方、「了解。早速メンバーを集めました。スケジュールは６月のまま。名古屋駅７時０１分の電車に乗って」との返事。続いてＦａｘも６月の計画書が修正されて送られてきた。これで決まりだ。

１０月１７日（日）朝からよく晴れている。週間予報よりずーとよい。７／１付けで川越から転出した人も混じって１３名が参加だそうである。

三岐鉄道の終点西藤原駅に着くと車組がいて、総勢１８名になっている。若夫婦と１歳半の赤ちゃんも混じってる。久しぶりの再会に喜び、９時過ぎ登山開始。この山はなだらかで初心者向けであり、３０年前私もよく来た山である。３つのコー

スのうち大貝戸道を登る。杉林の中、整備された登山道を zigzag に登っていく。〇〇合目の看板も新しい。９合目のすぐ下の山荘（無人）まで２時間余り。１８名も先頭と尻ではかなり開いている。私のペースは相変わらずマイペースで中間位にいる。今までの６回でまわりの人は私のペースを知っている。「いつも呼吸が乱れず、翌日もケロッとしている」と一目置いているようである。

頂上もなだらかで極めたと言う感激に乏しい。もう涼しい、早々と下山。

下山して予約した民宿で風呂に入り、最後の宴会である。デジカメでとったスナップがＴＶに映し出される。新兵器をわけなく使いこなす連中である。でも準備が大変だったと思う。近況を話し合い、７マウンテン最後の達成にみんな心地よいようである。集まってくれたみんなに感謝しつつ別れた。

あとがき

かくして７つ目を無事？登山し終えて今年の新年の宣言を１００％達成することができた。もちろん７マウンテンすべてを登ったのは私一人である。

６月末川越を去るとき、所員から、すでに達成していた６マウンテンの思い出をアルバムにして手渡してくれた。この気遣いもうれしいがそのアルバムの中には山のすばらしさ、初めで終わりと思う女性の感動の言葉、など感想文が詰まっていた。そして、最後の７つめの余白を残して・・・・

川越火力発電所営業 10 周年記念のひとつにもなった私の７マウンテン挑戦。ここで各山頂で吟じた漢詩をご披露しよう。

「堂々圧海」

「伊勢湾頭萬尺楼　　堂々圧海怒涛浮　　誰知此業為公益　　欲点明灯竟不休」

（伊勢湾頭、萬尺の楼）（堂々と海を圧して怒涛に浮かぶ）（誰か知る此の業、公益の

為）（明灯を点ぜんと欲し、ついに休まざるを）

［解説］

伊勢湾の岸には大きな建築物が建っていて、堂々と海に押し出すように浮かんでいるかのようである。だれが知っていよう、この仕事が公益の為であり、電灯電力を供給せんとして日夜休むことなく働いていることを。誰もが知っていてくれる。

この詩は中部電力の現社長太田宏次作であり、川越火力発電所の入口にある詩碑に刻んである。

私の在任中に行われた３，４号機（各１６５万ｋｗ）の増設は、完工によって総出力４７０万ｋｗの日本最大の火力発電所なったのであるが、この建設工事を管理している間の５年間は「７」をコンセプトとし、７シリーズであった。

すなわち、

●３・４号機とも各々７台の発電機（トレイン）で構成されていること。

●燃料のＬＮＧを輸送するＬＮＧ船が７隻である。

●３・４号機建設工事費が約７０００億円

●3号と4号の合計　３＋４＝７

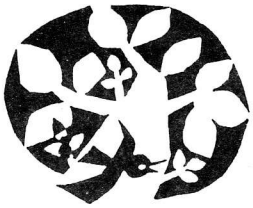
●ＬＮＧ産地のカタールまで約７０００マイル

●堂々圧海の漢詩は７言絶句

●所長在任期間　７年（新記録）

おまけ

●鈴鹿　７マウンテン



おあとの準備がよろしいようで。　　（おわり）